

# 〈新資料〉西田幾多郎書簡三通について

Three unpublished Letters of Kitaro Nishida

北野裕通

## 一、はじめに

この度、新たに西田幾多郎の書簡が三通見つかった。これらのうち二通は稲葉昌丸に宛てられたもので、発信の年は一通は明治三十一年、他は昭和十九年となっている。三通のうち残りの一通は、昭和十九年に稲葉昌丸の五男稲葉大受に宛てられたものである。

三通の手紙の見つかった経緯を簡単に述べておくと、筆者は西田が真宗的なものに多少とも自覚的に接近するに際して、稲葉昌丸が重要な役割を果たしたのではないかと考え——この論考は「西田幾多郎と真宗人たち——稲葉昌丸を中心として」（以下「西田と真宗人たち」と略記する）と題して別に発表した<sup>〔1〕</sup>——稲葉の日記など論証のために必要な資料を探していた。その折り、稲葉昌丸

の六男にあたられる橋川高明氏の御教示によって、ノートを積み重ねた高さにして一メートルにもならないとする稲葉の日記が故稲葉大受氏宅に保管されていたことを知って、大受氏の妻稲葉初代氏に探していただいたところ、残念ながら、それらはこころ、二三年の間に紛失されてしまった模様で見つからなかった。そして、その代りに出てきたのが、今度の西田幾多郎自筆の書簡である。それぞれの書簡の内容をみる前に、稲葉昌丸についてその略歴を示しておこう。

慶応元年 大阪市北区相生町（現、同市都島区片町）徳

龍寺住職稲葉了春の二男として生る。

明治八年 東本願寺創設の育英教校入学。

明治十四年 清沢満之らと東京留学を命ぜらる。

明治十八年 東京帝国大学理科大学入学。

明治二十二年 同上動物学科卒業。京都府尋常中学校教諭。

明治二十三年 尋常中学校校長兼任。

明治二十七年 第一中学寮教授兼大学寮教授。

明治三十年 清沢満之を中心として展開された大谷派宗門の革新運動に参画。この運動の主唱者の一人として、清沢を含む他の同志五名とともに本山より除名処分を受く。山口高等学校教諭。

明治三十二年 真宗京都中学長。

大正四年 同上退職。その後、本山内事局長、寺務総長等を歴任。

昭和三年 大谷大学学長。

昭和六年 同上退職。その後、宗政の方面に尽力しつつ、蓮如上人の研究に没頭。

昭和十九年 死去。

## 二、書簡の内容と解説

以下、三通の書簡を発信された年の順に「書簡一」「書簡二」「書簡三」として各々の書簡の全文を提示し、それらに若干の解説を加えてみたい。提示の仕方は大旨、書簡を収めた『西田幾多郎全集』第十八、十九卷（昭和四十一年刊）の「凡例」にしたがった。

〔書簡一〕 明治三十一年十月十三日 周防山口野田町十七番地稲葉昌丸宛 金沢市高岡町上敷ノ内十三より

御手紙被下難有奉拝誦候 承り候へは大兄には今度御子様を失はれ候由 御愁傷の程いかばかりかと身に泌む様に存しられ候 Nani と申す物は中々に刻薄の者に候 併しこれは又廣洲老師か幾多の棒喝にも優れて大兄を警醒したる事かと思へは大兄も幸福の人と存しられ候 小生も去月末頃俄に帰省いたし候処 父は尚存命にて其後も約十日間は辛くも生き延び居り候か 卒に鬼籍に上り候 併し小生の方は大兄のと異なり兼て覚悟いたし居り候こととて別に驚きも不申候 小供は二人とも入院いたし居り候か この方は少々はよき方に趣く様存しられ候 尚遠からず帰校の上はいろ／＼御話可申上候 草々頓首  
十月十三日 西田幾多郎 稲葉老兄机下

この書簡は明治三十一年に発信されたものであることが封筒表のスタンプによっても確認されるから、手紙の最後のところで「帰校の上はいろ／＼御話可申上候」と述べられていることでも分かるように、西田と稲葉が同僚としてともに山口高校学校に在職していたころのものである。しかし、このとき西田は父親の危篤の知らせを受けて、九月の末ごろに金沢に帰省していることも記されている。



本書簡が稲葉昌丸から彼の子供の死の知らせを受けた西田の、それに対する返書であることは文面から明らかである。文中、西田はまず自然 (Nature) がときに人間に示す冷酷残忍な一面に触れた後、しかし他面、そうした残酷に見える自然の仕打ちがかえって人間を覚醒する力となることに注意して、この点では稲葉を「幸福の人」だと慰め励ましている。その際、西田が「廣洲老師か幾多の棒喝」と述べているのは、いうまでもなく当時西田自身が生死脱得のためひたすら坐禅・参禅に打ち込んでいた状況があったからである。「廣洲老師」とは大徳寺の管長ともなった廣洲宗澤のことで、西田は明治三十年四月からこの老師に参じている。そのために、哀悼の気持を表わすはずの若き日の西田の手紙文は、少々勇ましい調子のもとなっている。我々は同じ西田が『国文学史講話』の序（明治四十年）において、人々の心を打たずにはおかない哀惜の文を残しているのを知っている。そこには例えば、「若きも老いたるも死ぬるは人生の常である、死んだのは我子ばかりでないと思へば、理に於ては少しも悲しむべき所はない。併し人生の常事であつても、悲しいことは悲しい、飢渴は人間の自然であつても、飢渴は飢渴である」といったような、人間の誠の心情に徹した言葉が吐露されていて、その後の西田の境地のいっそうの深まりを感じさせる。しかし、ひとは一度はこの書簡の西田において見られるような勇猛果敢な気概をもって苦難に当たるといふようなところを通じてこなければ、そうし

た円熟した境涯は手に入りにくいものである。それゆえ、こういう点を考え合わせれば、この手紙に見られる西田のあの勇ましい態度も、かえって禅修行の初段階にあった当時の西田の心意をよく伝えているといえる。

手紙の後半部では、西田は自分の父親の死のことや子供たちの病氣のことに言及している。西田の父得登は「三十一年十月九日、金沢市堅町五十三番地の三好家で肺炎のため六十五歳で死んだ」とされている。父親が「三好家」で亡くなっているのは、早くから西田の父と母寅三との折り合いが悪く、そのため父親の方が家族と別れてそこに住んでいたためである。このことから推測して、この書簡の発信地「高岡町上藪ノ内町十三」を、金沢に残されていた幾多郎の家族、すなわち母と妻と子供たちの住所と考えたいが、こう考えることに問題がないわけではない。というのは、当時西田は妻寿美と離婚中（明治三十年五月以降）ということになっているからである。このことを顧慮すると、上記の住所は母親の寅三が一人で住んでいたところと考えられるが、さらに寅三と寿美の関係が伯母・姪という血のつながった間柄であつてみれば、そこに寿美と子供たちが同居していなかったとも断定しにくい。それから、その住所が寅三と別居していた寿美と子供たちの住まいであった可能性もまったく捨て去るわけにはいかない。とにかくこういう事情で、さきの住所をいま直ちに特定することは困難である。

「小供は二人とも入院いたし居り候」とある二人の子供とは、長女の弥生（明治二十九年生れ、当時満二歳）と長男謙（明治三十一年生れ、当時四カ月）のことである。何の病気で入院していたのか不明であるが、子供らの看病のため、西田得登の葬儀には寅三と寿美は交代でしか出席できなかったといわれている。

〔書簡二〕 昭和十九年九月十六日 大阪府豊能郡南豊島村勝部十一稲葉丸宛 神奈川縣鎌倉市姥ヶ谷五四七より

大変に久しく御無沙汰致しました 突然御手紙をさし上げる様ですか、山邊君も逝去せられました由（何年か前）いつか汽車中にて同君に逢ひ尊兄の（そちらへお移り後の）御様子を聞きしことなど思ひ出され 旧を思ひ此頃いかゞ遊はして居らるるか御様子を伺ひ度なりました その後いかゞ御消光にや 私は元気に居りましたが 一昨昨年の秋より突然リユーマチスにかゝり病院に入り 一年程全く手足動かずベッドにねたきりでした 一昨年の秋より少しづつ動ける様になり医者のおすゝめによりそれ以来ずっとこちらに居ります もう大体よくなりましたが まだ左の足が不自由にてあまり外に出歩きはできませんぬ 併し幸にその他（今の處）故障もなきもの故 少しづつ讀んだり書いたり致し居ります

奥様にはいかゞ御達者にや 山口時代は元気でしたな 小柳も戸川も皆死んでしまひました 何卒御健康御大切にくれぐれ

もいのり上げます 九月十六日 西田生 稲葉老兄

西田はこの書簡で「何年か前」「汽車中にて」「山辺習学に会い、「大阪府北河内郡蹉跎村中振二五二三番地」から「大阪府豊能郡南豊島村勝部十一」へ移った稲葉の様子を聞いたという。西田は昭和八年からおもに夏と冬とをこの手紙の発信地「鎌倉市姥ヶ谷五四七」で過ごすようになるから、山辺に会ったのは京都と鎌倉とのその往復の車中のことであつただろう。しかも稲葉の勝部への転居は昭和十年ころ、西田が鎌倉を動かなくなるのは昭和十八年七月十八日以降のことだから、西田と山辺の車中での出会いはその間のことであつたと考えられる。

山辺習学（一八八二—一九四四、明治十五—昭和十九年）は明治四十一年に真宗大学を、大正三年に真宗大谷大学研究科をそれぞれ卒業、この間、浩々洞の同人として『精神界』の有力な執筆者のひとりであつた。こうした活動を通して山辺は、浩々洞や『精神界』に少なからぬ関係を有していた稲葉や西田とも、かなり早い時期からつながりができていたかもしれない。しかし、山辺が真宗大谷大学の研究科学生であつたとき、そのころ大谷に講義していた西田の講義を聴いていた可能性は大きい。また稲葉と山辺は、稲葉が大谷大学の学長であつた当時に山辺は同じ大学の教授であつた。こうしたことから、西田、稲葉、山辺の三者の間に交流があつたものと考えられる。その山辺習学が亡くなったのは昭和十九

八幡町豊能郡  
南豊島村勝部十一  
稻葉昌左様

大妻と云へば内妻と云ふ所  
子に交はるればと云ふ事  
持てたはりては天に道なき  
十丈の道にたゞりては  
と云ふ事人徳徳徳と云ふ  
「三」を云ふ思ひ去る旧を思  
ひ出せば、甚しき事なり  
かと思はれしを伺ふ事なり

有る事か、内妻と云ふ事  
之を云ふ事、大か、一昨昨年  
の秋、手紙に於て、三、十六  
日、内妻と云ふ事、一、年程  
前、中、豆、郭、の、事、へ、と、の、秋  
に、云、事、一、帖、年、の、秋  
より、一、帖、年、の、秋、に、

「送部」の「下」め、  
大伴と云ふ事、  
三、か、不、同、南、東、西、東、外  
上、出、去、る、事、  
東、出、る、事、  
の、事、  
の、事、

「送部」の「下」め、  
大伴と云ふ事、  
三、か、不、同、南、東、西、東、外  
上、出、去、る、事、  
東、出、る、事、  
の、事、  
の、事、

書簡二 便箋（青色縦罫、25×18センチ）4枚 硬筆

年九月十二日のことである。<sup>(13)</sup>恐らく西田はその訃報を新聞で知ったのであろう。「東京朝日新聞」「読売報知」とも、九月十四日付けで「山邊習學師」の死を報じている。そうだとすると、この書簡はその二日後に書かれたことになる。共通の知り合いの死が古いの迫りくる西田をして、ふと昔懐かしい友の様子を尋ねてみたくさせたのである。「書簡三」には「私もだん／＼旧友を失ひ近來特に何となく淋しく思ひ」と書かれている。

この「書簡二」で西田は自分の病氣のことを述べている。西田が身体の不調を訴えるのは、「一昨昨年」すなわち昭和十六年の秋口で、十月八日に武見太郎を訪ね、糖尿の気味ありと診断されている。十八日に帰洛、十一月六日にはリユーマチで府立病院に入院している。こうして、それからほぼ一年間、西田の長い闘病生活が始まる。動かなくなった手足の病もようやく癒え、西田が再び鎌倉に移れるようになったのは昭和十七年十月二十一日のことである。<sup>(14)</sup>

自分の近況を簡単に報告し終えた西田の想いは、そこから一挙に自分も稲葉もともに若かった山口時代へと翻る。稲葉の妻寿栄は明治九年の生れであるから、その当時はまだ二十歳を出たばかりである。「元気でしたな」という西田の口吻からは、単に若さだけでない寿栄の生来の頑健さまで伝わってくる。「書簡三」でも確認できるように、このとき彼女は六十八歳でなお健在であった。<sup>(15)</sup>しかし、かつて山口高等学校の同僚で、しかも西田と同じ明

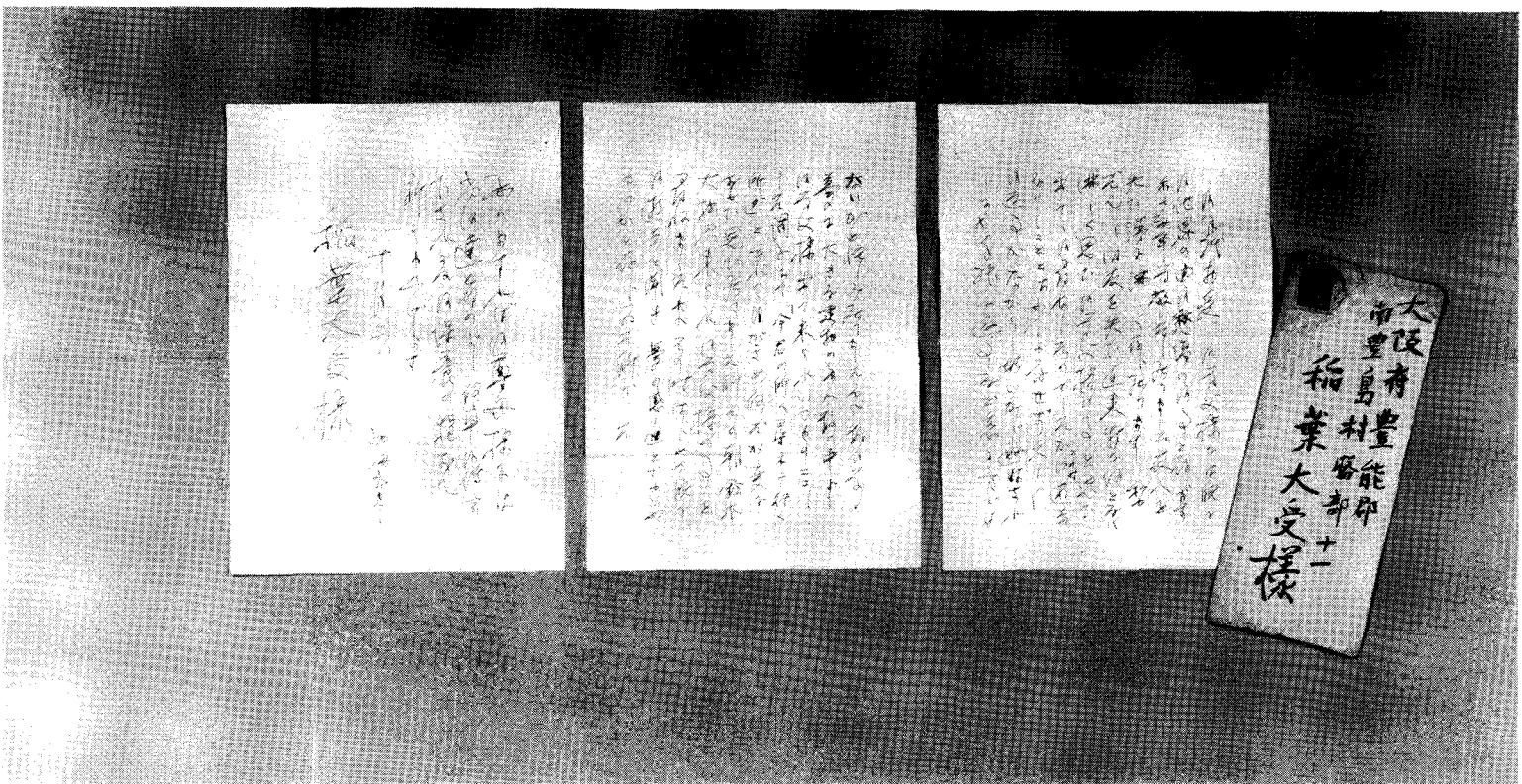
治三年生れの小柳司気太（一八七〇―一九四〇）は昭和十五年に、また戸川秋骨（一八七〇―一九三九）は昭和十四年にすでに他界してしまっていた。「皆死んでしまひました」には、老境のうちに残されたものの哀感が漂っている。

次第に悪化する戦況と孤独な老境のうちにありながら、しかし西田は最後の力をふり絞って執筆に余念がなかった。稲葉昌丸に宛ててこの手紙の書かれた昭和十九年九月十六日、西田は新たに「生命」論に着手している。<sup>(16)</sup>だが、このときには稲葉もまたこの世を去ってしまっていた。正確に言えば、稲葉はその年の一月二十九日、勝部の自宅にて八十歳の生涯を終えていた。

〔書簡三〕 昭和十九年十月二日 大阪府豊能郡南豊島村勝部十一稲葉  
大受宛 神奈川縣鎌倉市（極楽寺） 姥ヶ谷五四七より

御手紙拝受 御尊父様には既に御他界の由御愁傷の御事と存じます。私も多年尊敬いたし居りました友人を失ひ殊に淋しく存じ居ります。私もだん／＼旧友を失ひ近來特に何んとなく淋しく思ひ 御尊父様の事を思ひ出て、御尋ねしたのでした（その時）御逝去なりしことは少しも存せず 久しく御返事がなかりし故いかゞ遊はされしにや 手紙に返事など怠る方ではないかと怪み居りました處 数日前夢に大きな建物の多人数の中より御尊父様出て来られ いつものニコ／＼した調子にて「今君の所へ尋ネテ行く所ダ」と云れて目がさめ何だか変にお





書簡三 「西田用紙」(黄色升日入り200字原稿用紙、25.5×18センチ) 3枚、硬筆



もひ思ひ居りました所 その朝鈴木大拙君来られ御尊父様の事を尋ねました處 その時はじめて既に御逝去と聞き夢の感通でもいふものかと存じゐた所でした

承りますれば御尊母様には尚御達者のよし 何卒御伝言下され度御保養の程おん祈り申上げます 十月二日 西田幾多郎  
稲葉大受様

すでに見たように、「書簡二」は稲葉昌丸には届かなかった。

それを受けとったのは稲葉昌丸の五男稲葉大受であった。「書簡三」は「書簡二」を受けとった稲葉大受が、父昌丸のすでに逝去していることを知らせたのに対する、西田の返書である。

通 裕 野 北

この中で西田は、「久しく御返事がなかりし故いかゞ遊はされしにや 手紙に返事など怠る方ではないかと怪み居り」しところ、数日前に稲葉昌丸の夢を見たので、その朝たまたま訪ねてきた鈴木大拙に尋ねたところ、はじめてその死去していたことを知らされたと書いている。これは「西田と真宗人たち」でも取り上げておいたが、西田の日記の九月二十八日のところに、「大拙來訪。

稲葉昌丸昨年死去と聞知（昨夜夢）」と出ている記事と符合する。したがって「数日前」とは九月二十七日または八日のことで、それから間もなくして西田は稲葉大受からその父昌丸の死を知らせた書簡を受け取ったことになる。しかしこのときにはすでに「昨年死去」というのは誤り——なぜなら稲葉昌丸の死亡年月日は同

じ年の昭和十九年一月二十九日であるから——で、この点で少し不正確であるが、西田は鈴木大拙を通じて稲葉昌丸の亡くなったことを知らされていたのである。永年の友を失ったにもかかわらず、西田がこの書簡を感情を押し殺し、割合に淡々と綴っているのには、そんな事情もあったかと考えられる。

### 三、前稿「西田と真宗人たち」の検証

稲葉昌丸のことを扱った前稿「西田と真宗人たち」は、以上見てきた西田幾多郎の書簡三通の発見される前に脱稿された関係で、それらを参考資料とせずに書かれた。しかし、いまこうして新資料が出てきたわけだから、これらに照らして前稿を検証してみる必要がある。

先に結論をいえば、次の一点を除けば、現時点で筆者が前稿に訂正を加えるべきだと考える箇所はない。訂正を要する点とは、細部にわたるが、「西田と真宗人たち」で筆者は、昭和十九年九月二十八日の西田の日記の記事、すなわち「大拙來訪。云々」について、「西田は稲葉に随分長く会っていなかったに違いない。しかし心の奥深くで『良友』のことが気にかけられていたであろう」と解しておいた。この推測は必ずしも全く誤っているとはいえないと思うが、新資料「書簡三」中の、先に引用した「久しく御返事がなかりし故いかゞ遊はされしにや 手紙に返事など怠る

方ではないかと怪み居りました處 数日前夢に……御尊父様出て来られ」と述べられている箇所を参照し、それにしたがって書き改められるべきである。

しかし、この点以外には、今回見つかった新資料は前稿「西田と真宗人たち」で展開された筆者の主張を例証するのにいっそう役立ち得ても、それによってその主張をさらに訂正もしくは撤回する必要はいささかも生じていないと信ずる。例えば「書簡一」に関していえば、稲葉が自分の子供を失った悲しみを、わざわざ金沢に帰省中の西田に打ち明けたのは、西田こそそういう場合に何か精神的な支えとなって自分を慰謝してくれる人物だという確信が彼にあったからに違いない。事実、西田は父親の死、子供らの病氣、そのほか家庭内が不和の状態にありながら、すぐに稲葉を励ます返事を出したのである。そうして、二人のこうした心の通いあいがあるの最晩年に至るまで絶えることがなかったことは、西田が「だん／＼旧友を失ひ近來特に何んとなく淋しく思ひ」、稲葉のことを思い出して差し出されている「書簡二」がそのことを雄弁に物語っている。西田はかつて稲葉のことを「相信すへき良友」と評したことがあった（明治三十二年、山本良吉宛て書簡<sup>19</sup>）。「書簡三」（昭和十九年）でも、西田は稲葉のことを「多年尊敬いたし居りました友人」といっている。これを見ても、西田の稲葉評が終生変わることなく、いかに高いものであったかがわかる（「書簡一」（明治三十一年）、「書簡二」（昭和十九年）を通じて、西

田が稲葉に対して「老兄」という敬称を用いているのもその証左となろう）。

しかし、残念ながら今回発見された資料の中にも、西田が稲葉を介して真宗的なものに近づいたのではないかとする筆者の想定を、はつきり裏付けてくれるものは何もなかったといわねばならない。この点で、現在紛失されている稲葉の日記等、さらに新たな資料の出現が待望される。

最後に、今回見つかった西田幾多郎の稲葉昌丸宛て書簡が、わずか三通であったことについて触れておきたい。今度出てきた西田の書簡計三通は、故稲葉大受氏に宛てられた他の数通の書簡等と一緒にビニール袋に入れられた状態で発見された。これよりすると、袋に納められていたものは、大受氏があらかじめ最重要と思われるものだけを整理して保管しておいたものと推測される。もしそうだとすれば、稲葉昌丸に宛てられた西田幾多郎の私信についても、他のものとともに「整理」された可能性がないとは断言できない。しかし、「整理」といえば、大受氏以前に稲葉昌丸自身が廃棄を行っていた可能性の方が大きいように思われる。いずれにせよ、筆者は西田の稲葉昌丸宛て私信について、その「整理」の行なわれたことは間違いないことと考えている。その理由は、西田の日記で稲葉に発信されたことになっている端書<sup>20</sup>あるいは手紙が今回発見されなかったからである。それらは恐らく、内容がそれほど重要でないものとして、受信してから間も

なく、もしくはその後「整理」されてしまったのであろう。要は、今回発見された二通の書簡が、西田の稲葉昌丸宛て書簡のすべてではないということである。

注

(1) 『人間と世界——中西智海先生遺曆記念論文集』(永田文昌堂、一九九四年) 所収。

(2) ちなみに、その年の西田の日記は九月二十三日で中断されている(『西田幾多郎全集』第十七巻、三二頁参照)。

(3) 稲葉昌丸には十人の子供(男六人、女四人)があった。明治三十一年に死亡した稲葉の子供は次男であったことまでわかっているが、それ以外は不明である。

(4) 西田が稲葉宛ての書簡で廣州老師の名前を出しているのは、稲葉もその名を知っていたからだろう。しかし、それはどうしてであろうか。最も考えやすいのは、日ごろ西田が稲葉にこの老師のことを話していたためとすることである。だが、西田の紹介ですでに稲葉がこの老師に相見していた可能性が全くなかったとはいきれない。というのは、稲葉は大徳寺(明治三十二年七月)、建仁寺(明治三十五年七月)、東福寺(大正六年ころ)と専門道場を有する京都の禅宗寺院に好んで止宿している風がうかがわれ、この間に参禅していたのではないかと思われるからである。この点について、橋川高明氏は次のように言われている。

「父がいつ、どこで、禅の修行をしたかということは明確には聞いて居りませんが、大徳寺の接心に参加して打坐したようなことを聞いたようなおぼろげな記憶があります。父は『現在の日本仏教は

墮落して、形骸と葬式仏教になってしまっている。わずかに生きているのは、臨濟禅の一部と浄土真宗の一部で、そこだけに仏教が生きた宗教として残っている』という(これは言葉通りではありませんが)意味のことを言っていました。『そこだけに仏教が今もわずかに生きている』という言葉は、たしかに父がそのとおりの言葉で言っていたと思います。父の弟子の中にも真宗大谷派の僧籍がありながら、大徳寺で坐禅をしていた人がありました。例えば藤岡了淳師。……父は藤岡師を評して「あの人は禅腹で、思い切ったことをしばしばやる」と言っていました。……藤岡氏は無字の公案を通っている、父から聞きました」(筆者宛て書簡)。

(5) 『西田幾多郎全集』第一巻、四一七頁。

(6) 上田久『祖父西田幾多郎』南窓社、昭和五十六年、一〇三頁。

(7) 同右、五八頁および、六六頁の注(五四) 参照。

(8) 西田は明治二十九年四月ごろに「金沢市備前町七六」の得田耕方(寿美の実家)に移ったことになっている(下村寅太郎編『西田幾多郎——同時代の記録』岩波書店、昭和四十七年、二六三頁)。こういう経緯からすると、他方では寿美が子供たちだけを連れて実家に帰っていたことも考えられる。

(9) 上田久、前掲書、一〇三頁および、一一一頁の注(二三) 参照。

(10) 日下無倫「稲葉昌丸先生略年譜及び論文著述年表」、『大谷學報』第二十七号、昭和二十三年三月、四五頁。

(11) 橋川高明氏による。

(12) 西田は「一昨年の秋より少しづつ動ける様になり医者すゝめによりそれ以来ずっとこちらに居ります」と述べ、「一昨年」すなわち昭和十七年から鎌倉を動いていないように書いているが、日記を見ると、昭和十八年六月十六日に帰洛、七月十七日に鎌倉に帰って

いる（『西田幾多郎全集』第十七巻、六六六、六六八頁参照）。

(13) 以上の山辺習学の経歴については左記を参照。

『日本人名大辞典』平凡社、一九七九年、八一六頁。

(14) 上田久『続 祖父西田幾多郎』南窓社、昭和五八年、二〇九―二一八頁参照。

(15) 稲葉寿栄について。

「母、稲葉寿栄は明治九年生れにて、十六歳頃に父昌丸に嫁し、没年は昭和四十二年二月三日、九十一歳であったかと思えます。生来健康であつたらしく病臥したという記憶はありません（病氣としては白内障がありました）。亡くなった時も格別の病氣ではなく、医師は『老衰』と申しております。昭和十九年頃は元氣であつたと思えます。」（橋川高明氏の筆者宛て書簡）

(16) 『西田幾多郎全集』第十七巻、六九〇頁。

(17) 稲葉昌丸と鈴木大拙の関係については、稲葉が大谷大学の学長であつた時期（昭和三―六年）に、鈴木大拙が引き続き同大学に在職していたことくらいしか知られていないが、両者の間にはかなり親密な付き合いがあつたようである。「父が大谷大学長時代には鈴木大拙氏とは親交があつたことはたしかだと思います。鈴木大拙氏のことについては、父から大拙氏の個人的な身上のことなどを聞かされたことがあります。」（橋川高明氏の筆者宛て書簡）

(18) 『西田幾多郎全集』第十七巻、六九一頁。

(19) 『西田幾多郎全集』第十八巻、四九頁。

(20) 『西田幾多郎全集』第十七巻、例えば、二五三、二九一頁参照。

#### 付記

小論作成に際し、上記三通の西田書簡を心よく筆者にお貸し下さっ

た橋川高明、稲葉初代の両氏に厚くお礼を申し上げたい。ことに橋川氏には、筆者のいただいた諸々の疑問に、そのつど懇切丁寧なご教示をいただいたことを申し添えておく。